



菅原伴耕さん

●すがわら・はんこう
脚本演出部門=原作・脚本。平成17年から市民センター社会教育課長としてファンタジーに参加。ファンタジーは以前から鑑賞し、今回初めて原作・脚本を担当する。短歌、川柳などもたしなみ、サラリーマン川柳で全国300選に。宮守町、59歳

「ただ、あまり多くの話しを受け入れてしまうと、まとまったものにはならないんです。キャストの思いを組み入れながら全体を仕上げていくことが演出担当の役割なんじゃないかな。」
樋口 話しを聞いてもらい、自分の好きにやらせてくれてとてもやりがいがありました。糠森 自分なりに考えて演じてもらう方が、自然な演技になるんです。みんな考えてつくっていくからファンタジーなんだと私は思っています。いろいろな人が台本を書いたり、演出したりするから、市民の舞台らしさが表現できるんだと。

——作品を通して伝えたいことは何ですか？
菅原 わたしの伝えたい言葉は劇中に一つだけ込めさせて

「伝えたかったことは「頑張つて生きる」こと。」
菅原 わたしは「いじめられても頑張つて生きていこう、人を信じることは悪いことではない」ということを伝えたいと思います。命生きていて、根っこから悪いんじゃないかって、何かがあつて悪い人になつてしまつたんだと。そういうところを引き出せばいいなと思いました。糠森 伝えたい部分はしつかり伝わつたと思いますよ。演出ではなく、キャストのおかげで菅原 わたしの書いたものよ

り何倍も素晴らしい表現をしてみらつたと思つています。公演を見ていても、一回目よりも二回目、二回目よりも三回目と、表現力がどんどんよくなつていくんです。樋口 今回初めて感じたんですが、観客の笑い声や拍手が、すごい力になるんです。「観客は、もう一人の役者だ」ってよくいわれるんですけど、初めて実感しました。ここで笑うんだとか、ここで拍手するんだとかが分かつて、それでもうドキドキしてきて。菅原 そういえば、今回の話の舞台となった達曽部からも百人くらい公演を見に来てくれたんですよ。郷土芸能や衣装でも協力してもらつて、本当に良かったと思つています。樋口 いろんな人の支えがあつて、市民の舞台がつくれるんだなあって感じました。



樋口恵さん

●ひぐち・めぐみ
キャスト部門=おかん役。4歳のとき子役としてファンタジーにデビュー。キャスト以外には合唱や吹奏楽で参加。学業などのため一時遠野を離れるが、3年前に戻り再びファンタジーに。「迷うんだったら、まずやってみる」という行動派。上細町、25歳。

拍手や笑い声つてすごい力になるんです。

「公演を終えての今の気持ち」
菅原 自分の作品が少しずつ出来上がつていくことを間近で見れてすごく楽しかった。糠森 わたしはみんなにおんぶに抱っこだつたんで、すごく感謝しています。好きなことを存分にやらせてくれた家族にも感謝しています。樋口 やつと終わつたという部分ともう終わつちやつたんだという部分の両方です。引き受けて悩んだ時期もあつたんですけど、カーテンコールで客席から拍手が送られた瞬間「あきらめないで頑張つてよかつた」って思いました。見に来てくれた市民の皆さん、すべてのスタッフにおかちゃんと言葉を借りてお礼を言いたいと思います。「本当に何がら何まで、ありがとうがなした」。

●取材を終えて
開演二時間前。大ホール前のホワイエは市民の笑顔でいっぱい。温かいそばやおにぎりを食べながら、これから始まる物語を楽しみに待つ。手づくりの温かさ、見る人と演じる人がさりげなくひとつになる舞台。三回の公演は常に満員だ。キャスト、スタッフは二時間の公演のために、七十五日間を費やす。地域への愛着と誇りを胸に、仲間と助け合い、一つのものを真剣につくる。遠野には古くから昔話を楽しむ文化があつた。物語をつくり、話し、聞く、そんなどこにもあるような文化。そんな文化を大切にしてきたからこそ、ファンタジーが生まれた。ファンタジーは「現代版昔話」。その昔話をつくり、話すために一万二千人が力を注いだ。その昔話を聞くために八万人が会場に足を運んだ。ビデオやインターネットが誕生し、現在はたくさんのお楽しみが溢れている。しかし、いまだ多くの人がファンタジーに訪れる。そこでしか味わえない息遣いと一体感を楽しむ夢と希望に溢れた昔話は見る人、つくる人をとりこにし、懐かしさとさわやかな春の風を感じさせてくれる。遠野には文化を大切に作る風土がある。ファンタジーという大切な文化。これから私たちが一人一人の手で支え、はぐくんできていきたい。



公演を終えた三人(原作者=菅原伴耕さん、演出担当=糠森正和さん、おかん役=樋口恵さん)に話しを伺つた。作品への思い、作品を通して伝えたいこと、舞台をつくる魅力、今の気持ち……。携わつた人だからこそ分かる魅力を語つてもらつた。

語

遠野物語
ファンタジー

る—3

——この昔話を選んだ理由はなぜですか？

菅原 一昨年のみやもりホールにこけら落としであんべ光俊さんのコンサートを行いました。あんべさんから「宮守の民話をコンサートで使いたい」と言われ、そのとき選んだのが「継子のおかん」だつたんです。彼の独特の語りを聞くうちにだんだん引き込まれて、そのとき感じたことを書いてみようと思つたのがきっかけです。糠森 台本を読んだとき、主演のおかんは大変な苦勞をしたんだなあって感じましたね。樋口 わたしはぬかさん糠森から「主役で」つて言われてたんですけど、一度断つたんで



糠森正和さん

●ぬかもり・まさかず
舞台演出部門=舞台演出。第22回公演からファンタジーに参加。ものをつくるのが好きだったこともあり、主に大道具を担当。舞台監督を2度ほど経験し、今回初めて舞台演出を担当することになった。「何事も一生懸命」が信条。愛称は「ぬかさん」。松崎町、56歳。

自ら考え、つくつていくことがファンタジー。

でも、断つたあと何度か脚本を読んでいくうちに「やっぱりやりたい」と思い、「やらせてください」つてお願いしました。菅原 この話は悲劇なんですけど、脚本検討委員会の阿部順吉委員長に「喜劇にしなさい」つて言われたんです。悲劇を喜劇にですよ。さあどうしようかつて悩んで、いろいろ登場人物を増やしてみたりして。

「作品づくりでのこだわりを聞かせてください。」
糠森 キャストには「自分でイメージしてやつてください」つてお願いしました。キャストがイメージしたものをそのまま演じてもらつたんです。気になつた部分だけ、少し修正を加えましたけど。樋口 逆にキャストの演技力とか、イメージ力が試されたんです。私は台本に書かれていた部分よりも、登場人物それぞれの性格とか背景とか内面的な裏の部分を考えて演じました。一番気を付けたのは、菅原さんとぬかさんのイメージする部分を壊さないようにすることがかな。糠森 周りからの注文も多か

- 主なスタッフ
- キャスト 34人
- パレスタジオ 11人
- 湯屋神楽 11人
- 音楽(作詞・作曲) 5人
- 遠野高校吹奏楽部 24人
- 遠野緑峰高校吹奏楽部 21人
- 遠野中学校吹奏楽部 22人
- 遠野高校音楽部 20人
- 遠野中学校合唱部 4人
- 遠野少年少女合唱隊 19人
- 遠野市民混声合唱団 8人
- コンプリオ銀河混声合唱団 20人
- 大道具 18人
- 小道具 14人
- 衣装・化粧 55人
- 美術 22人
- 音響 5人
- 照明 5人
- わらべ唄指導 3人
- お手玉指導 2人